



ハノーファー市が後押し 公共施設で、デポジットの リユースカップ導入！

紙コップのコーヒーを片手に歩く風景は、ドイツでもよく見かける。ドイツで年間30億個のカップが消費されており、資源の無駄使いが批判されている。

ハノーファー市は年々増えるばかりの紙コップを減らそうと、リユースカップの導入を決めた。有機分解できる素材で、洗浄して70～80回使える。1個2ユーロのデポジットをかけ、市内での流通を目指している。

以前はコーヒーというと、喫茶店で飲みながら新聞を読んだり、おしゃべりをするというのが普通だったが、最近はチェーンのカフェが増

え、持ち帰りが一般化。カフェやキオスクなどあちこちで「Coffee to go」と英語表示を見かける。一つのスタイルとして市民権を得ており、中には店内で飲むのに紙コップのみというチェーンのカフェもある。

市は大きな催し会場や会議場、見本市をはじめ、サッカー場など公共施設や公共性の高い場所でのリユースカップの使用を目指す。徐々に一般的なカフェや、持ち帰りコーヒーを提供しているパン屋などでも導入を進めていく予定だ。

デポジットカップだと自分で洗ったり、お店に返しに行かなければならないから、どこまで使用が広がる

田口理穂＊ドイツのエコあれこれ

No. 2

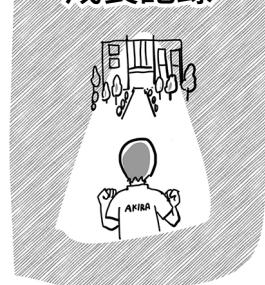


赤と黒の色使いがおしゃれな
リユースカップ

か未知数である。だからこそ、自治体が音頭を取ってすすめることに意義がある。ちなみにドイツでは2015年、一人当たりのコーヒー消費量は年間162リットルで、ビールの106リットルよりも多かった。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録



ドイツの学校は小学4年生までなので、6月に小学校の卒業式があり、明は大泣きました。ほとんどの子が泣いていましたが、しばらくするとケロッとする子が多い中、明は最後まで泣いていました。よっぽど学校が楽しかったんだな（それとも気が弱いのか）。

4年間クラス替えはなく、担任も同じなので、結びつきはとても強いようです。入学時クラスには25人いましたが、留年や転出入で入れ替わりがあり、卒業時は19人でした。卒業後は大学を目指すギムナジウムに行くか、職人や一般職になる実践学校に分かれのですが、明のクラスは15人がギムナジウムに行きます。市内には15ほどギムナジウムがありますが、偏差値による格付はなく、人気のところはくじ引きです。

残念ながら明は希望する5校からもれ、全く違う学校に振り分けられました。そのため州学校局や市、学校と交渉し、新聞社に理不尽さを訴え、紆余曲折の末、第5

希望のギムナジウムになんとか潜り込むことができました。留年生のために用意していた席が一つ空いたというのです。

その学校は一年前にできたばかりで、明の上は一学年しかもく、伝統もなく、サークル数も少なく、校舎もまだ工事中（いずれ9学年入るが、今は2学年分しか完成していない）で、私は少々不満でしたが、「入ると決まった学校が一番いいと、親は信じるべし」と友達に言われ、考え直しました。いくら学校の評判が良くても、先生やクラスメートとの相性もあるでしょう。

また、聞いた話では、新設校ゆえに先生たちはやる気満々で、教室には最新設備がそろい、子どもたちは上の学年によるプレッシャーがなく伸び伸びしているとのことです。運とタイミングで決まったのですから、これでよいのでしょう。その学校には小学校時代の友達もたくさん行くし、明は8月4日の入学式を心待ちにしています。

追記：受験はいやだいやだと思っていたが、努力がまったく意味を持たないというのも、なんとも切ないものだと初めて知りました。その分、勉強についていけないとどんどん留年させられるので、入ってからが本番です。